

Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment*
(Edinburgh University Press, 2015) の解釈構図と分析方法

犬塚 元 (法政大学、政治学史・政治思想史、inuzuka@hosei.ac.jp)

はじめに この報告の目的と内容

壽里竜『ヒュームの懐疑的啓蒙』(エディンバラ大学出版会、2015)は、レフリー付き英文ジャーナル掲載の論文(4、5、7章)や、海外学会での報告原稿を一冊に統合して、海外の学術出版会から公開された英文著作である。こうした出自は、それだけで、本書が学術的成果として一定の水準をそなえることを間接的に示す形式的属性である。

そのほかの形式的な特徴としては、本書が、きわめて“重装備”であることを指摘することもできる。最近に至るまでの、多くの研究文献(二次文献)が渉猟・言及されている。ヒューム自身のテキスト(一次文献)については、最近の研究動向をふまえて『イングランド史』のトータルな分析ばかりか、生前著作集の各版異同にまで踏み込んだ検討がなされている。ヒュームのテキストのみならず、古代から一九世紀に至るまでの(初期近代を中心とする)多くの思想家・著述家のさまざまな著作(ヒューム以外の一次文献)が、ヒュームの思想史的位置を確定するための *textual* な *contexts* として、多く言及されている。多くの著者、多くのテキスト、多くのトピック、多くの解釈争点、つまりは多くの知識・情報が、この一冊のヒューム研究書に盛り込まれている¹。

そのように重装備で情報が多く、多くのミクロな解釈を積み重ねている本書を扱う(紹介・吟味する)にあたって、ここでは、各論における個々の解釈争点のレベルで解釈の妥当性を吟味するのではなく、多くの知識・情報のなかでもすれば見失われて曖昧になりがちな、本書の基本的な解釈構図、分析概念、分析方法(つまりは本書の概要)をあえて大掴みにざっくりと整理し、そのことを通じて、本書の研究史上の位置や意義を定めるアプローチを採る。言い換えれば、各章の原型となった雑誌論文や学会報告がすでに国内外の学界で一定の評価を与えられてきたことをふまえ、その次元ではなくて、一冊の本にまとめられた際に整合的に束ねられて、ひとつの体系的解釈を提示しえているかどうか、についてここでは検討する。

そのために、ここでは、まず第一に内容に関して、本書の中心に位置する分析概念に注目しながら、本書の基本的な解釈構図を明かにする。具体的には、(1)「懐疑的啓蒙」という全体を貫く分析概念の意味を明確にする。それは、二つの問いに分節化できる。1-1)「懐疑的啓蒙」はなにを意味しているか、どのような思想史の見取り図を描いているか(どういう思想史的地図のなかにヒュームを位置づけているか)。1-2)「懐疑的啓蒙」というその分析概念、分析枠組みは、各章における各論的部分の解釈

¹ “重装備”であることは、歴史研究としての思想史研究としては長所であるが、多くの情報を著者自身がもてあまして、と言いうる側面があるのかもしれない。壽里は、風呂敷を広げたくて、ここではこれ以上論じない、ここでは判断を下す必要はない、という語り口を多用するからである。My primary concern is neither to delineate... (p.11); this book does not aim to give a strict definition of Epicureanism (p.16); beyond the scope of this book (p.102); we do not need to dwell on... (p.221); I will not enter... (p.224); we do not need to dwell on... (p.242); I will not dwell on... (p.278).

によってきちんと支えられているか（各論部分できちんと証拠や根拠の提示ができていないか）、総論と各論で分析概念の意味内容が揺らいでいないか。

啓蒙概念の多様化のなか、とくに近年の＜形容詞付きの啓蒙＞概念が氾濫・乱立している研究動向のなかでは、なおさらに、本書が掲げる「懐疑的啓蒙」という分析概念の意義や有効性について吟味しておくことが重要であろう。

*啓蒙をめぐる解釈動向（リヴィジョニズムの3つの波）、第1波：ナショナル単位の啓蒙、第2派：さまざまな宗教的啓蒙、第3派：さまざまなく形容詞付き啓蒙（「保守的啓蒙」、「穏健啓蒙」、「プラグマティックな啓蒙」、「大西洋啓蒙」、「同感の啓蒙」など）

そののち、分析概念の吟味を通じた内容の確認に続いて、第二に、(2) 本書における思想史解釈の方法論について検討したい。本書は、「歴史的ヒューム」の解明を明示的に課題として掲げ、思想史学・歴史学的方法論を採用する。思想史方法論としては、これまで、text か context か、あるいは著者の意図か読者の受容か、という対抗軸で議論がなされることが多かったが、そうした目の粗いマクロなレベルの方法論論議は、実際の思想史解釈／テキスト解釈の現場ではほとんど役には立たない、理念をめぐる争いである。ここでは、もつとマイクロなレベルでの方法論に焦点をあわせ、本書がどのような方法・手法でヒュームについて思想史的解釈を下しているかを確認して、その特徴や意義を指摘する。

1 「懐疑的啓蒙」という分析概念の意味と意義

1-1) その意味内容

(1) 「啓蒙」をめぐる本書の理解（とくに ch.1, §2）

- ・「プロジェクトやアジェンダとしての啓蒙」という定式化を却下 (p.6)²。
- ・歴史意識・文明意識（新しい時代という意識）に着目した啓蒙の理解。啓蒙を特徴付けるのは、社会の改善 betterment という問題意識、ナラティブ（歴史叙述）という叙述スタイル(pp.7-8)。
- ・（とくにヒュームにおける啓蒙に即して）「現世的価値への強いコミット strong commitment to worldliness」、「この世の改善にむけた規範的主張」（pp.20-21）。

(2) ヒュームの「懐疑主義」をめぐる本書の理解（とくに ch.1, §4）

- ・特定の懐疑主義の教義ではなく、「懐疑主義の「精神」」(p.13)。
- ・人間の知性の限界をふまえた知的探求(pp.13-14)。宗教的ドクマティズムに対する批判 (p.15)。
- ・「近代エピクロス主義の受容」(p.15)：原子論的・唯物論的自然理解、功利的・快楽主義的倫理学、段階的歴史発展、正義の人為性、神の不介入(pp.15-16)。ヒュームのエピクロス主義：「唯物的な基礎付けを除外した近代エピクロス主義」、ヒュームはエピクロス主義の真理（自然理解）も懐疑 (pp.16-17)。
- ・ヒュームの「懐疑主義の「精神」」：(1) 社会の記述的・自然主義的説明、(2) 画然たる区分 demarcation への疑い、(3) 社会の不確実性・脆弱性についての認識。以上ゆえの、ヒュームの曖昧さ ambiguity,

² 壽里は、「プロジェクトやアジェンダとしての啓蒙」という啓蒙理解を（相当に強く）退けるが、その根拠は十分に説明されていない（「プロジェクト」や「アジェンダ」の定義はない）。思想は、社会や政治への働きかけをもつ限り（つまり政治思想・社会思想として属性をもつが）、なんらかの「プロジェクト」や「アジェンダ」であるとみなすことが可能であるし（つまり「プロジェクト」や「アジェンダ」はラディカリズムの専有物ではない）、なにより、壽里の啓蒙理解のなかに含まれる「社会の改善 betterment」は、それ自体が「プロジェクト」や「アジェンダ」ではないか。

self-concealment、「コミットしていないかのような態度 a seemingly uncommitted attitude」(p.20)

- ・あらゆるドクマティズムの回避(p.274)。(ここから壽里は結論部分の最終ページにおいて、ヒュームは多様な立場のあいだの対話の出発点になりうる、との現代的意義を論じる(p.283))。

(3) 「啓蒙」と「懐疑主義」の関係をめぐる本書の問いと答え

(リサーチクエスチョン)

- ・「われわれが検討すべき問い(本書における主要な関心)とは、「インダストリ、知識、人間性」などの肯定的価値についてのヒュームの擁護は、どのようにしてヒュームの思想の(保守的に見えるが実際には)懐疑的な側面によって支えられているか」(p.21)。

(本書の解答(本書の中心的命題))

- ・ヒュームの哲学的懐疑主義(「穏健な懐疑主義 mitigated scepticism」)は、「認識論以外の著作」つまりは「社会、政治、歴史的著作」においても重要性をもった(p.11)。「ヒュームの「懐疑主義」は、彼の社会的、政治的、歴史的著作において中心的役割を果たした」(p.273)。
- ・「文明社会は不安定であるというヒュームの鋭敏な理解(これは人間理性や進歩についての懐疑主義の産物である)は、彼の明示的な文明擁護を必然的に弱めることにはなっていない。むしろヒュームは、近代の諸価値が脆弱であると理解したからこそ、その価値を支える側に留まり続けたのである」(p.23)、「条件付きの conditional」の近代擁護(p.274)。
- ・「ヒュームの懐疑的啓蒙とは、近代の価値の核心と彼がみなしたもの(物質的・精神的洗練 refinement and politeness)を、彼が一切のドクマティズムに陥ることなしに、独特のやり方で支持したその方法を示す概念である」(p.21)
- ・それゆえ本書の対抗命題は、ヒュームは懐疑主義ゆえに保守主義となった、というミルの解釈(p.2)。保守主義ではないとの指摘が随所に(ex. pp.86, 135)。

(4) 本書の分析概念・解釈構図の意義

- ・ヒュームにおける2つの、相反するかのように見える契機の統合的説明。
- ・ヒュームの思想の全体像(とくに哲学と社会思想・政治思想の関係)の解明を意図(cf. フォーブズ 1975、坂本 2011)。
- ・近代商業社会を擁護した啓蒙思想家、という日本におけるヒューム解釈の成果の継承・発展的修正。

1-2) 各論部分における「懐疑的啓蒙」

(各章におけるヒュームの懐疑主義に関わる記述の概要)

- ・第2章(観念連合説・想像論): 想像を重視したのは反ラショナリズム。ヒュームの想像の区分には、明確な区分を懐疑する態度(p.41)。観念連合説はエピクロス主義的だが、ヒュームはその唯物論にも懐疑を向けて、同時代のほかの連合説(同時代のエピクロス主義)とは異なる(ヒュームの系譜の連合説は哲学的急進派に継承された)。
- ・第3章(オピニオン論): 「オピニオンについてのヒュームの見解の可塑性・不定性は、彼の「人間の学」の体系や、彼の懐疑的啓蒙の中心に位置している」(p.72)、「オピニオンの大いなる可変性をめ

ぐるメタ理解」が「距離をおいた省察の習慣」につながる(p.86)³。抵抗権をめぐる議論には明確な区分を懐疑する態度(p.84)。

- ・第4章(奢侈論): ヒュームの奢侈論はエピクロス主義(道徳の世俗化・脱宗教化)の系譜に属するが、ただし、外見と本質の乖離(偽善、演技)をめぐるアウグスティヌス主義的批判の契機はない(マンデヴィル、スミス、ルソーとの違い)。ヒュームは名誉感覚の作用に肯定的であり、この点ではシャフツベリの、キケロ=ストア主義的。
- ・第5章(聖職者批判、エラストゥス主義): 懐疑主義(ここでは不可知論の意味(p.131))に由来する宗教論のわかりにくさ・両義性。エピクロス主義・スピノザ主義の影響(p.135)。理神論的なヴォルテールのエラストゥス主義や寛容論と比較すると、ヒュームはベールに近い。
- ・第6章(理想国家論): 人間本性の完成可能性への疑いや、制度の脆弱性をめぐる認識には、「懐疑の「精神」」(p.179)。ウォルポールをめぐる議論には明確な区分を懐疑する態度(p.193)。
- ・第7章(文明論・歴史変動論): 人口論を始めとする文明論は、ニュアンスのある議論(懐疑主義)であり、ヒュームは社会がつねに変動的・流動的にあると認識した。ヒューム自身の理解において、文明社会や制度が脆弱性であるという認識と、近代的価値の擁護(あるいは経済論)は矛盾せずに両立していた。後者は、むしろ前者の枠組みの「内部においてのみ」、つまり前者(懐疑主義)「にもかかわらずではなく、それゆえに」(p.238)存在した。
- ・第8章(19世紀前半の受容史): 急進主義者がヒュームに言及することもあった。ヒュームの解釈は多様であり、ミルの解釈は一般的に支持されていたわけではなかった⁴。

2 本書の思想史解釈の方法

かつて、分担執筆のかたちでそれぞれの思想家についての記述を並べた西洋政治思想史の通史叙述に対して、「いかなる意味で歴史叙述と言いうるのか」という趣旨の書評が執筆された。たしかに、複数の思想家の関係をどのような方法で論じるか、という点は実際の思想史解釈において決定的に重要であり、それは、ひとりの思想家を中心に扱うタイプの思想史解釈においても(回避することはできず)まったく事態は同様である(ある思想家に思想史的位置づけを与えることは、ほかの思想家との関係を確定することである)。そうであるがゆえに、複数の思想家の関係を扱う分析は、解釈者の分析方法(についての意識)や力量がもっとも問われるパートのひとつである。

たとえば、ヒュームは、「迷信と熱狂」において「最善のものの腐敗は最悪のものを生み出す」(p.225)と論じたが、同じ指摘はプラトンにも存在する。この共通性・類似性を根拠にして、プラトンはヒュームに影響を与えた、あるいはヒュームはプラトンの・プラトン主義者である、と解釈しうるか。いうまでもなく、これは根拠が不十分な、乱暴な推論である。ヒュームのその主張はプラトンに直接由来した、

³ この第3章における懐疑主義の理解(序章における懐疑主義の定義との整合性)や、本章の位置には、疑問がある。世論(人々の意識)が歴史的に変動する、という認識対象の可変性をめぐるヒュームの認識(あるいは世論をめぐるヒュームの歴史主義的認識)が、ヒュームの認識作用・認識活動の曖昧さ(としての懐疑主義)として読み替えられてはいないだろうか(つまり、世論の可塑性・不定性と、世論をめぐる認識の可塑性・不定性について、混同がないだろうか)。また、(世論と想像をめぐる連関は理解できるにせよ)、実質的には世論をめぐる政治思想を中心的に扱う本章を、第2章とともに「ヒュームの懐疑的啓蒙の理論的基礎」(p.21)をめぐる序論的部分に位置づけることが適切かどうかについても、疑問が残る。

⁴ この第8章の議論は説得的だが、ただし、1830年以前には英語圏で「保守主義」概念が一般には普及していなかったことをふまえると(実際、本書の分析でも、同時期の思想家たちが「保守主義」という概念を使用したことは確認できない)、1838年のミルの議論から遡及するかたちで、ヒュームが「保守主義」とみなされていたかどうか、との歴史学的問いを設定した点は、アナクロニズムではないだろうか。

いずれの思想家も第三の思想家の影響を受けていた（あるいは一般的なクリシェだった）、あるいは、両者のあいだには（単数ないし複数の）第三者が介在しており間接的な影響しかなかった、という具合に、影響-被影響関係、受容関係についてはさまざまな関係の可能性があるがゆえに、慎重な推論をおこない、利用できるエヴィデンスから確実に論じうる範囲については自覚的である必要がある（上記の事例では、この類似のデータだけでは、列挙したいずれの関係である可能性も排除できず、またそれ以上にならぬ確実なことを語るのは不可能である）。

より一般的に定式化すれば、複数の思想家の関係を歴史的・思想史学の資格において論じる場合には、それらの思想家を比較対象するのがなぜ妥当か（サンプルの選択が恣意的ではないか）という点をまず吟味・正当化したうえで（つまり、われわれが分析に着手する段階ですでに知っている複数の思想家を並べて、思想の内容を比べる、という素朴な方法はもはや十分とはいえず、歴史学・思想史学の資格において論じるのであれば、なぜそのサンプルを選んだのかという方法的問いに対してまず応答できなければならない）、複数の思想家の関係については、たんなる類似か、直接に影響関係があったか、だれかを媒介にして間接に影響があったのか、べつの同じソースから影響を受けていたのか、等のかたちで思想家間の関係の類型分けについて、根拠にも基づいて判定の作業をおこなう必要がある。

（本書における思想家の関係性をめぐる分析）

（A）同時代の思想家を比較・対照する事例

- ・第4章（奢侈論）スミス、ルソーとの比較
- ・第5章（宗教制度論）：スミス、ヴォルテールとの異同比較
- ・第6章（理想国家論）：ルソーとの比較
- ・第7章（文明論）：タッカーとの異同比較
- ・第8章（受容史）：バークのヒューム理解（seems not to (p.258)）
- ・終章：ヴォルテールとの比較

（B）textual evidences が残されている思想家との関係を検討する事例

- ・第2章（観念連合）：バークレー、マルブランシュ、ベイル、スピノザ（p.33）

（C）類似性にもとづいて影響・受容関係を推定する事例

- ・第2章（観念連合）：ホップズ、ロック、ハチソンの議論の紹介。
- ・第3章（オピニオン）：テンブル、ホップズ（a lack of direct textual evidence (p.65)）、ロック（can be considered (p.66)）、シャフツベリ（Hume is unlikely to accept (p.66)）、ベール（another possible influence for Hume (p.67)）からの影響の可能性を推定。
- ・第4章（奢侈）：ハチソン、モンテスキュー、ヴォルテールとの比較。シャフツベリ、キケロとの類似性の指摘⁵。
- ・第5章（宗教制度論）：スピノザ（could also have influenced Hume's anti-religious attitude (p.139)）、シ

⁵ たとえばここに登場する「シャフツベリ的」という形容詞は、シャフツベリが起源という意味か、シャフツベリと同じグループに分類できるという意味か、曖昧である。

ヤフツベリ (seems to borrow (p.139))、マンデヴィル、バーネット (possible intellectual source (p.140)) からの影響の可能性を推定。(※一般的に、エヴィデンスが十分ではなく可能性の提示に留まるという記述が維持されているが、ただし、章の結論部分ではなぜか Hume is heavily indebted to his predecessors, such as Shaftesbury, Mandeville and Burnet. (p.168)と強い断定になっている)。

- ・第6章(理想国家論): スウィフト (similar (p.201))、タッカー (a more immediate and possible inspiration for Hume; no evidence (p.201))、ラパン (possible (p.210)) からの影響の可能性を推定。
- ・第7章(文明論): テンプル⁶、フォントネル (could also resort to (p.223)) からの影響の可能性を推定。

このように、思想家間の関係をめぐる分析に関して、本書は、ヒュームに対する影響(ヒュームによる受容)をさまざまに検討しているが、その多くは、ヒュームと当該思想家の類似性にもとづいた二者関係の推定(影響を受けた可能性の提示)である。エヴィデンスの脆弱な、確実性にはほど遠いこうした分析方法・分析結果について、意味がない、というのがここでの結論ではない。思想家関係の関係、とくに影響や受容をめぐる関係については、確実なエヴィデンスにもとづいて明確に論証できる関係は多くなく、エヴィデンスが十分には残されていない場合がむしろ多い。そのため、可能性・蓋然性の指摘にとどまることを自覚・明示したうえで(つまり方法論について自覚的でありながら)二者関係について推定をおこなう作業にも重要な思想史的意義や役割があり、可能性の指摘に留まることを十分に自覚・明示しながら推論をおこなった点で本書には重要な貢献をなしている。(ただし、時として、資料の説明能力を超えた推定をおこなう勇み足があることも否定できない(p.168の事例))。

⁶本書は、第3章、第7章で、テンブルからの影響を推定している(テンブルとヒューム関係を相対的に重視している)。評者の問題関心はこの関係をより一般的に、ヒュームにおける復古王党派からの政治思想の継受、という解釈命題に接合できるかどうかである。